

# 不登校を生きる子どもたち

奥地圭子

## (1) 不登校調査五〇年と不登校をめぐる状況

病気欠席でもない、経済的理由でもないが学校に行かない、行けない子どもたちは、一九五〇年代から存在している。はじめは、アメリカの研究の影響もあり、「学校恐怖症」とか「登校拒否症」と名づけられ、精神科医や児童相談所などが関わるが多かった。

小学校は一九四七年より、中学校は一年ずつ三年かけて義務制となり、日本国民の全ての教育を受ける権利が学校で保障されることになった。それは、戦争で働き手を失い、家も食料もない中では、どんな家庭の子であれ無償で学べる体制は非常に素晴らしい制度であった、と言える。しかし、全ての子どもが学校に喜んで行くか、となると、行かない子、行けない子、行っていない子は事実上存在するが、はじめは少数であった。

長期欠席のうち病気や経済的理由を除いて今でいう「不登校」を国が調査し始めるのは、一九六六年である。はじめ

めは「学校嫌い」、七〇年代半ばから激増していくが、その頃から「登校拒否」と言い、二〇〇〇年代から高い横バイ状態となり、この頃から「不登校」というようになった。統計をとるには区切りが必要で、はじめは年五〇日以上欠席をとっていたが、早期発見・早期対応の考え方が主張され、九一年から年三〇日欠席をとるようになった。しかし、それで効果があったわけではなく、今も小中学生は一二万三〇〇〇人の不登校がいる。

この調査は、昨年二〇一六年で、調査開始より五〇年経ったことになる。つまり、日本の社会が不登校と出会って半世紀経つのだが、日本社会は不登校をどう認識してきただろうか。

社会の価値観は、戦後の高度成長期から、小中高大学へと受験戦争を勝ち抜いて高学歴を取り、いい会社就職するのが幸せと考える社会となり、学校へ行くのは当然、行かない・行けないのは普通じゃない、問題の子だというの